

資料

プリセプターシップに関する研究の動向と課題 (2001-2005)

Trend and Problem of Research on Preceptorship(2001-2005)

室伏 圭子 豊嶋三枝子

Keiko Murofushi Mieko Toyoshima

獨協医科大学看護学部

Dokkyo Medical University School of Nursing

要旨 本稿の目的は、日本におけるプリセプターシップに関する文献を整理・検討することを通して研究の動向を探り、今後の課題および方向を明らかにすることである。

「プリセプター」と「新人教育」のキーワードで医学中央雑誌検索を行ない（発行年2001年～2005年）、原著・総説38件を抽出した。それらの文献を、テーマ・内容別、掲載誌別、研究方法別、著者の所属別に整理をおこなった。

著者の所属別では、7割近くが「病院のみ」であった。研究方法別では、「質問紙調査」「面接調査」「質問紙・面接調査併用」の合計数が約9割を占めていた。掲載紙別では、「日本看護学会論文集」が約半数を占めていた。テーマ・内容別にみると、プリセプターの認識、プリセプターと新人看護師の認識の比較、プリセプターとプリセプター支援者の認識の比較や支援体制などに関する研究が多くを占め、プリセプターシップの評価まで行う研究はごく僅かであった。今後の課題としては、プリセプターシップが新人教育の効果を上げているかどうか評価する研究が必要である。また、新人看護師の認識に関する研究が少なかったことから、新人看護師のリアリティショックを客観的に把握するための研究により積極的に取り組んでいく必要がある。

キーワード：プリセプター プリセプターシップ 新人教育 新人看護師

Key words : preceptor, preceptorship, the education of beginner, beginner nurse

I. はじめに

プリセプターシップとは、1960年代にアメリカにおいて、看護学生の臨床へのスムーズな移行を促進するために教育者と管理者によって考え出された方法で、役割の社会人化と成人学習の考え方を基盤としている。1人の新人看護師に対して1人のプリセプター(指導する看護師)がマンツーマンで、ある一定期間、意図的・段階的・系統的な指導を行う新人教育の一方法で

あり、新人看護師のリアリティショック予防にもつながる¹⁾²⁾。日本においては、1980年代後半から、基礎教育よりも新規採用看護師へのオリエンテーションに用いられてきた。

ただし、わが国においてプリセプターシップが十分な効果をあげられているかは疑問であり、改善しなければならない点もあるのではないかと考えられる。今回、日本における文献を整理・検討することを通して、プリセプターシッ

表1 テーマ・内容別分類と年次別文献数 (医学中央雑誌2001-2005)

テーマ・内容別分類	発行年					計
	2001	2002	2003	2004	2005	
① プリセプターの認識	6	1	4	1	1	13
② 新人看護師の認識	—	—	3	2	1	6
③ プリセプターと新人看護師の認識の比較	1	2	3	1	2	9
④ プリセプター支援	3	1	4	2	0	10
計	10	4	14	6	4	38

プに関する現在の研究の動向を探り、今後の課題および方向を明らかにしたいと考えた。

II. 研究の動向

2007年1月、医学中央雑誌WEBにて「プリセプター」と「新人教育」のキーワードで検索を行ない(発行年2001年~2005年)、その後、プリセプターや看護教育に関連がみられない内容の文献、および会議録については除外していった。以上のような手順で抽出した文献は、原著・総説38件であった。内訳は、2001年10件、2002年4件、2003年14件、2004年6件、2005年4件であった。(以下、2001年を01年、2002年を02年…のように表記する。) それらの文献を、1) テーマ・内容別、2) 掲載誌別、3) 研究方法別、4) 著者の所属別に整理をおこなった。以下、1)~4) について詳細に述べる。

1) テーマ・内容別分類

テーマ・内容をもとにして分類したところ、①プリセプターの認識、②新人看護師の認識、③プリセプターと新人看護師の認識の比較、④プリセプター支援の4項目に分類された(表1)。表1に示した分類項目にしたがって、主要文献について研究の内容を述べていく。

① プリセプターの認識

「プリセプターの認識」は、01年6件、02年1件、03年4件、04年1件、05年1件の計13件であった。これらの研究対象はプリセプターである。

プリセプターの「負担感」あるいは「ストレス」に関する研究として、西川・向井他³⁾は、

プリセプターが役割を果たす責任に負担感を持っていることを明らかにし、支援体制を整備することが課題であるとした。森・西本他⁴⁾は、プリセプターは時期に関係なく負担を感じながら役割を担っていることを明らかにし、プリセプターの負担感の軽減には周囲の応援・支持といったサポートについて、病院・病棟での意思統一が必要であるとした。山本⁵⁾は、プリセプターはストレスを感じ、ストレスによる症状が出現しやすいこと、また、オーバーワークを感じていたり看護業務が整備されていない環境にある者等はストレスを増幅させやすいことを明らかにし、病棟全体で新人看護師を指導・支援していく必要があるとした。古田⁶⁾は、バックアップシステムからの支援を受けられていると感じていても、プリセプターのストレスは生じているとした。里田・今里他⁷⁾は、プリセプターのストレス認知とコーピングを明らかにした。

プリセプターの成長や達成感に関する研究として、竹村・高橋他⁸⁾は、プリセプターが達成感を得るための重要な要素として、〈フィードバック〉〈精神的支え〉〈充実感〉をあげた。また、鈴木・竹森他⁹⁾は3つのプリセプター体験過程を見出し、そのうち【自己成長パターン】は「役割への意欲・負担感」「共同意識」「自己承認」「自己成長感」で構成されていることを明らかにした。寺澤¹⁰⁾は、プリセプターとしての4つの段階を見出し、それぞれ「漠たる使命感」「未熟さへの気づき」「指導上の葛藤」「プリセプター体験の位置づけ」とした。

プリセプターの自己評価に関する研究では、

プリセプターの自己評価は全体に低い傾向にあること¹¹⁾、プリセプターの経験回数と自己評価点数には関連があること¹²⁾が報告されていた。

ソーシャルサポートに関する研究では、プリセプターに対するソーシャルサポートのうち、「賞賛」「接し方の助言」「プリセプター承認」を得ることが困難であること¹³⁾、プリセプターがメンター機能全体の役割を果たすことには限界があり、組織としての対応が望まれること¹⁴⁾が報告された。

② 新人看護師の認識

「新人看護師の認識」は、03年3件、04年2件、05年1件の計6件である。これらの研究対象は新人看護師である。

新人看護師のストレスや職場適応に関する研究として、茨田・久野他¹⁵⁾は、新人看護師はプリセプターに話を聞いてもらう事を求めているとした。別府・山野辺他¹⁶⁾は、困った時の相談相手としてプリセプターに相談する新人看護師は70%にとどまり、また、プリセプターに相談している新人看護師は、先輩・主任看護師、単位責任者にも相談していることを明らかにした。

新人看護師の自己効力に関する研究として、神田・伊藤他¹⁷⁾¹⁸⁾は、プリセプターシップにおける新人看護師の自己効力に関連する要因を検討した結果、自己効力を高める要因は、看護技術の上達・成功、学習内容の実践・成功、先輩看護師の熟練した看護ケアをみて学ぶこと等であり、自己効力を下げる要因は、学習性無力感、同期が自分よりできていること、先輩からの厳しい態度等であることを明らかにした。

新人看護師の個別性に関する研究として、朝倉¹⁹⁾は、社会人経験のある新人看護師のプリセプターに指導を受ける姿勢や思いを明らかにした。

③ プリセプターと新人看護師の認識の比較

「プリセプターと新人看護師の認識の比較」は、01年1件、02年2件、03年3件、04年1件、05年2件の計9件である。これらの研究対象はプリセプターと新人看護師である。

越智²⁰⁾は、プリセプターと新人看護師の間に常に「意識のズレ」があることを明らかにし、

それが引き起こされる主要因は、新人が指導者の反応を見ながら考えたり行動したりしていることに指導者が気付かず教育を行っていることにあるとした。石塚・藤村他²¹⁾は、プリセプターは一職業人として新人に対応しているが、新人は生活の変化にとまどっている状態であるという、両者の認識の相違を示した。齋藤・小形他²²⁾は、プリセプターは先輩看護師としての役割モデルは取れているが、プリセプターの役割である精神的理解者になれていないとした。また、沼田・森田他²³⁾は、コーチング流タイプ分けテストを両者に施行することによって、プリセプターが自分と相手のタイプを知ることで行動変容につながったことを明らかにした。小野²⁴⁾は、プリセプターと新人看護師の評価比較および分析をおこない、プリセプター・新人看護師間で、心理面のサポートができていると感じていることなどを明らかにした。中川・田牧他²⁵⁾は、プリセプターは指導方法に悩みながらも新人看護師の成長を実感し、そのことは自分の喜びにもつながっていること、新人看護師はプリセプターの存在に支えられていることを明らかにした。

④ プリセプター支援

「プリセプター支援」は、01年3件、02年1件、03年4件、04年2件の計10件である。これらの研究対象は、プリセプターとプリセプター支援者、およびプリセプターシッププログラムである。

プリセプターシップを支援するスタッフの認識に関する研究としては、プリセプターシップを支える立場にある中堅看護師らは、ストレス因子「意欲」「社会性」に対してストレスが高くなっており、「自力問題解決的」「他力問題解決的」な対処行動をとっているものが多いことが指摘されていた²⁶⁾。鷺尾・橋口他²⁷⁾は、新人教育に対するスタッフの意識は高いが、プリセプター支援に対する意識はプリセプター未経験者に低く、プリセプターの持つストレスも経験者は理解できるが、未経験者は理解できないという結果を明らかにし、支援体制を充実させるための課題を示した。

表2 掲載誌別分類と年次別文献数 (医学中央雑誌2001-2005)

発行年 掲載誌別分類	2001	2002	2003	2004	2005	計
日本看護学会論文集	6	2	5	3	2	18
院内誌	1	1	2	2	—	6
雑誌	—	1	3	1	1	6
看護教育大学校論文集	2	—	1	—	—	3
学会誌	1	—	—	—	1	2
大学・看護学校紀要	—	—	2	—	—	2
その他	—	—	1	—	—	1
計	10	4	14	6	4	38

プリセプターとプリセプター支援者との意識のズレに関する研究として、鈴木・渡邊²⁸⁾は、プリセプターの多くは「看護実践能力不足の自覚」や「スタッフからの協力・支持不足」という悩みをもっており、その対処として「スタッフへのプリセプターシップ代行依頼」を求めていること、プリセプター支援者がその現状を理解するためには、臨床経験だけでなくプリセプターの経験やプリセプターに関する学習が必要であることを明らかにした。

プリセプター支援体制に関する研究として、小山・金澤他²⁹⁾は、調査対象施設において76%が「新人指導は全員がするものだ」と考えている傾向にあり、役割の明確化が必要であるとした。和泉・横溝他³⁰⁾は、継続教育プログラムに参加した中堅指導者のプリセプター役割機能の変化を調査し、職場内および職場外教育において新任者への教育計画を遂行することで機能が高まったとした。吉元・梅田他³¹⁾は、対象病院のプリセプターシステムは認知機能も高く、役割認識に関しても統一できており、スタッフの協力体制は整っていること、プリセプターシステムについて、経験者では8割が改善を望み、アソシエートプリセプター、集合教育への要望が高いことを明らかにした。

プログラム分析に関する研究として、中根・出羽澤他³²⁾は、スタッフによる支援は、プリセプターエイド型、チームリーダー型、全員参加

型のおよそ3パターンに類型化されていることを明らかにした。

2) 掲載誌別分類

掲載誌別では、「日本看護学会論文集」「院内誌」「雑誌」「看護教育大学校論文集」「学会誌」「大学・看護学校紀要」「その他」に分類された(表2)。

「日本看護学会論文集」は、01年6件、02年2件、03年5件、04年3件、05年2件の計18件であった。うち看護管理12件、看護教育5件、精神看護1件であった。「院内誌」は、01年が1件、02年1件、03年2件、04年2件の計6件であった。院内誌の種類は、病院医誌、病院学術雑誌、病院看護研究集録などであった。「雑誌」は、02年1件、03年3件、04年1件、05年1件の計6件であった。雑誌の種類は「看護展望」が2件、他雑誌が1件ずつであった。「看護教育大学校論文集」は、01年2件、03年1件の計3件であった。「学会誌」は、01年1件、05年1件の計2件であった。「大学・看護学校紀要」は、03年2件であった。「その他」は、03年1件であった。

3) 研究方法別分類

研究方法別では、「質問紙調査」「面接調査」「質問紙・面接調査併用」「その他」に分類された(表3)。

「質問紙調査」は、01年6件、02年2件、03年7件、04年4件、05年1件の計20件であった。既存の評価表や分類表、自作の質問紙を用いる方法がほとんどであり、その回数は1回が主で

表3 研究方法による分類と年次別文献数 (医学中央雑誌2001-2005)

研究方法による分類	発行年					計
	2001	2002	2003	2004	2005	
質問紙調査	6	2	7	4	1	20
面接調査	3	—	5	2	2	12
質問紙・面接調査併用	—	—	1	—	1	2
その他 (実践報告、プログラム分析、KJ法)	1	2	1	—	—	4
計	10	4	14	6	4	38

表4 著者の所属別分類と年次別文献数 (医学中央雑誌2001-2005)

著者の所属別分類	発行年					計
	2001	2002	2003	2004	2005	
病院のみ	6	4	10	4	2	26
病院と大学	2	—	2	2	1	7
大学のみ	—	—	1	—	—	1
その他	2	—	1	—	1	4
計	10	4	14	6	4	38

あるが、半年間あるいは1年間に渡り、定期的に質問紙調査をおこなう方法が2件あった。「面接調査」は、01年3件、03年5件、04年2件、05年2件の計12件であった。その回数は1回が主であるが、一定期間に継続的に3回おこなう方法も1件あった。「質問紙・面接調査併用」は03年1件、05年1件の計2件であり、うち1件は、質問紙調査をプリセプターと新人看護師の双方に対しておこない、プリセプターに対してのみ面接調査をおこなっていた。「その他」は、01年1件、02年2件、03年1件の計4件であった。「その他」の内訳は、実践報告2件、プログラム分析1件、KJ法(新人研修およびプリセプター研修の際にグループワークでKJ法に沿って紙片に記載する方法)1件であった。

4) 著者の所属別分類

著者の所属別では、「病院のみ」「病院と大学」「大学のみ」に分類された(表4)。「病院のみ」は、01年6件、02年4件、03年10件、04年4件、05年2件の計26件であった。「病院と大学」は、01

年が2件、03年2件、04年2件、05年1件の計7件であった。「大学のみ」は03年1件であった。「その他」は、01年2件、03年1件、05年1件の計4件であった。「その他」には雑誌編集部、看護教育大学校が含まれる。

Ⅲ. 考察および今後の課題

01年に10件だった文献数は、02年に半分以下に減ったものの03年には大幅に増加し、04年以降再び半数以下となり、減少傾向にある。03年の文献数の内訳を著者の所属別分類と年次別文献数からみると、すべての種類の所属から研究が発表されているが、特に「病院のみ」が10件と際立っている。03年の文献数増加は、病院スタッフにおけるプリセプターシップに対する研究関心への高まりを示していると思えることができよう。その後の04年および05年の文献数の減少は、「病院のみ」の減少が影響している。1980年代後半に始まったプリセプターシップがある程度定着し、問題や課題はあるものの、病院ス

スタッフの研究対象としては選ばれることが少なくなってきたといえるかもしれない。

掲載誌別分類と年次別文献数をみると、どの年次においても「日本看護学会論文集」が最も多く、全体の約半数を占める。研究方法別分類と年次別文献数では、「質問紙調査」「面接調査」「質問紙・面接調査併用」を合わせると約9割であり、これら以外の方法は非常に少ない。そうした中で中根・出羽澤他²⁰⁾は、20施設を分析対象としたプログラムの現状分析という方法を採用している。各々の組織に適したプリセプターシップのあり方を探る上で貴重な知見を示しているといえよう。

著者所属別分類と年次別文献数では、総数の7割近くが「病院のみ」である。プリセプターあるいはプリセプター支援者としての視点から研究が出発しており、臨床現場においてプリセプターシップのよりよいあり方を模索していることがうかがえる。一方、「病院と大学」「大学のみ」は8件と少なかった。新人看護師のリアリティショックおよびプリセプターシップの現状をより客観的に把握し、プリセプターシップに関する研究の視野を広げてみていくためにも、大学所属の研究者がこの分野に関心をもって取り組んでいくことが望まれる。

テーマ・内容別分類別にみると、①の「プリセプターの認識」は件数が最も多い。その内容は、「負担感」あるいは「ストレス」、プリセプターの成長や達成感、自己評価、ソーシャルサポートに関するものである。最も注目されているのはプリセプターの「負担感」あるいは「ストレス」に関する内容であり、多くの研究が、それらを明らかにすることによって、プリセプターの負担感やストレスをできるだけ減少させられるようなプリセプター支援の方向性を探っている。②の「新人看護師の認識」の内容は、ストレスや職場適応、自己効力、新人看護師の個別性に関するものである。テーマ・内容別分類の中では最も件数が少ない。神田・伊藤他¹⁷⁾も、「過去の研究において、プリセプターシップについては、制度や病棟での支援体制について、またプリセプターの役割についての文献はある

が、新人看護師に焦点を当てた文献は少ない」と指摘しているが、本稿においても同様の結果が得られた。今後、新人看護師の認識に注目した研究がおこなわれることを期待したい。③の「プリセプターと新人看護師の認識の比較」においては、多くが、プリセプターと新人看護師の認識を比較し、相違を検討することによって課題を明らかにしようとしている。④の「プリセプター支援」においては、プリセプターとプリセプター支援者の認識に関する研究および、プリセプター支援体制に関する研究がおこなわれており、主に一つの病院におけるよりよいプリセプターシップ支援をめざそうとする研究が多い。

以上みてきたように、プリセプターシップに関する研究の動向では、プリセプターの認識、プリセプターと新人看護師の認識の比較、プリセプターとプリセプター支援者の認識や支援体制などに関する研究が多くを占めていた。また、プリセプターシップの評価まで行う研究はごく僅かであった。今後は、プリセプターシップが新人教育の効果を上げているかどうかを評価する研究が必要であると考え。すなわち、プリセプターシッププログラムの現状分析・評価をおこない、施設に適したよりよいプログラムを開発するための研究が多く行われていくべきではないだろうか。一方、アメリカから導入されたプリセプターシップの目的が新人看護師のリアリティショックを軽減するためであるならば、新人看護師のリアリティショックを客観的に把握する研究も必要であろう。病院スタッフのみならず、大学所属研究者が研究に参画し、現状把握と分析・評価を行っていく必要があると考え。

引用文献

- 1) 波多野梗子：系統看護学講座 専門1 基礎看護学1 第13版, p242, 医学書院, 2001.
- 2) 見城道子：プリセプターシップ, 和田攻・南裕子他編, 看護大事典, p2421, 医学書院, 2002.
- 3) 西川京子, 向井章子：プリセプターの負担

- 感—プリセプターになる前の負担感—, 日本看護学会論文集 - 看護管理, 34号, p48-50, 2003.
- 4) 森明美, 西本なをみ他: プリセプターの負担感の具体的な内容の検討, 日本看護学会論文集 - 看護管理, 32, p135-137, 2001年.
 - 5) 山本英子: プリセプターのストレスとサポートシステム—影響因子の分析—, 看護展望, 28(7), p838-846, 2003.
 - 6) 古田史: 新卒看護婦・看護師教育に対するプリセプターの意識調査, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究, 27号, p170-175, 2001.
 - 7) 里田佳代子, 今里とみ子: プリセプターのストレス認知とコーピング, 小倉記念病院紀要, 35(1), 5-8, 2002.
 - 8) 竹村和巳, 高橋里恵他: 精神科新人プリセプターの達成感, 日本看護学会論文集 - 精神看護, 36, p110-112, 2005.
 - 9) 鈴木綾, 竹森裕子他: プリセプターの成長を促すための効果的な支援についての検討, 日本看護学会論文集—看護管理, 34, p213-215, 2003.
 - 10) 寺澤明子: プリセプターシップにおけるプリセプターの看護専門職としての成長過程, 日本赤十字広島看護大学紀要, 3号, p45-52, 2003.
 - 11) 山本和代, 岩本明美: 自己評価表からみたプリセプターの役割達成の状況, 日本看護学会論文集—看護管理, 33, p131-133, 2002.
 - 12) 乗富貴子, 森睦子他: プリセプターの背景と自己評価との関連, 日本看護学会論文集—看護管理, 35, p57-59, 2004.
 - 13) 渡邊理香, 鈴木奈緒子他: プリセプターのソーシャルサポートの特性—クラムのメンター機能の分類を用いての分析, 日本看護学会論文集—看護管理, 32, p363-365, 2001.
 - 14) 村上亜紀: プリセプターのメンター機能について—クラムのメンター機能の分類を用いての分析, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 27, p222-229, 2001.
 - 15) 茨田真希子, 久野雅子他: プリセプターとしての関わり—新人看護師のストレス軽減に向けた考察—, 東京医科大学病院看護研究集録24回, p10-14, 2004.
 - 16) 別府千恵, 山野辺みち子: 新人看護師の職場適応を促すプリセプターの役割, 日本看護学会論文集—看護教育, 34, p133-135, 2003.
 - 17) 神田知咲, 伊藤真由美他: プリセプターシップにおける新人看護師の自己効力に関連する要因の検討, 日本看護学会誌, 14(2), p85-91, 2005.
 - 18) 伊藤真由美, 山本梨津子他: 新人看護師の自己効力に関連する要因—プリセプターの有効な働きかけ方—, 淀川キリスト教病院学術雑誌20巻, p27-29, 2004.
 - 19) 朝倉真弓: 社会人経験のある新人看護師のプリセプター指導を受ける姿勢と思い, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, No.28. 2003.
 - 20) 小野恵美子: プリセプターシップの評価—プリセプターとプリセプティの評価比較・分析, 大阪医科大学付属専門学校紀要, 第9号, p30-34, 2003.
 - 21) 中川茂美・田牧余史子他: プリセプターの不安・悩み・心身の疲弊, 日本看護学会論文集—看護教育, 32, p68-70, 2001.
 - 22) 越智小百合: 新人教育における指導者の問題—新人看護師とプリセプターの‘意識のズレ’を通して—, 日本看護学会論文集 - 看護管理, 35, p295-297, 2004.
 - 23) 石塚博子, 藤村博之他: 新人看護師とプリセプター間のリアリティショックについての認識の比較分析, 看護展望, 27(11), p1283-1287, 2002.
 - 24) 齊藤かおり, 小形朱美他: NICUでの新人教育の問題点と今後の課題, ~プリセプターシップ方式での指導から得られたこと~, 栃木母性衛生, 30, p24-28, 2003.
 - 25) 沼田幸美, 森田美香他: CSIを使用することによるプリセプターのプリセプティ—for に対する関わりの変化, 日本看護学会論文集—看護教育, 36, p63-65, 2005.

- 26) 甲斐美智代, 安村真由美他:プリセプター・プリセプティに関わる中堅看護師のストレスと対処行動, 山口県看護研究会学術集会プログラム・集録第2回, p36-38, 2003.
- 27) 鷺尾雅永, 橋口あゆみ他:プリセプターを支援するスタッフの意識と行動の相違, 看護教育, p136-138, 34, 2003.
- 28) 鈴木奈緒子, 渡邊理香他:プリセプターとプリセプター支援者との意識のずれからみたプリセプターシップにおける課題, 日本看護学会論文集:看護教育, 32, p176-178, 2001.
- 29) 小山祐子, 金澤さおり他:A施設における看護スタッフのプリセプターに対する支援体制の実態, 日本看護学会論文集-看護管理, 35, p54-56, 2004.
- 30) 和泉比佐子, 横溝輝美他:中堅指導者の新任者教育に関する継続教育プログラムの評価(第1報)-プリセプター役割機能に焦点をあてて-, 北海道公衆衛生学雑誌, 18, p135-141, 2004.
- 31) 吉元明美, 梅田美佐代他:プリセプターのストレス調査からみた現状と課題-プリセプターシステムをより効果的にするには-, 日本看護学会論文集-看護管理, 33, p182-184, 2002.
- 32) 中根薫, 出羽澤由美子他:プリセプターシッププログラムの現状分析-プリセプターへの支援体制に焦点を当てて-, 日本看護管理学会誌, 4(2), p46-53, 2001.